

人類の進化と農業の運命

鈴木恒雄*

(昭和63年5月31日受付)

Human Evolution and the Destiny of Agriculture

Tsuneo SUZUKI*

Science and technology applied to modern agriculture have produced material abundance in human life, but they have also created worries about evil influences in addition to this achievement. In order to review this complex problem from a broader viewpoint, the story of animal evolution must be connected coherently with the history of human civilization on the basis of recent advances in anthropology and sociology. In this report, the expansion of civilization to the northern hemisphere regions is described and its evil effects are also examined. In the age of civilization, the specialization of vocations and the mechanization of production processes accelerated rapidly. The more specialized jobs became, the more incomplete human personality became. However, the Industrial Revolution in the 18th century contributed to the predominance of materialism and money worship in our society. If we overcome the crisis of modern agriculture and if we wish to develop modern agriculture in line with human evolutionary processes, it is not enough to improve low efficiency of production and economy within agricultural industries. It is required for us, rather, to take up the hard challenge of building the kind of higher personality that our ancestors had in the early days of human history.

はじめに

総じて言えば、われわれは科学技術の導入や開発によって人類生活文明の発達をもたらしたと同時に、大きな不安を抱くようになったのだが、依然として、専門化した生産者、技術家、科学者たちが自己の直接関係している限られた範囲での生産効率の向上と利益の増大を最高目標としているのでは、全体としてのより高い価値を見

失う結果となり、間もなく大きな損失と破滅とが頭上に落下するのではないかとこの予感をもつに至った。

このような種類の問題は、現代の資本主義社会あるいは市場経済の範囲内での検討では本質的部分は明らかにできない。もっと考察の範囲を拡げ、現在まで人類が発展させてきた生存ないし生活様式を長い人間の進化史の視野でとらえ直してみなければならない。一面からすれば、農業の歴史は科学技術の歴史でもあるが、そのよう

* 鳥取大学農学部農林総合科学科経営管理學講座

* *Department of Farm Business Management, Faculty of Agriculture, Tottori University*

な人類の営みは人間進化の長期軌道の上に沿っているのだろうか。現代までの農業やその他の産業の歩みは人間の未来とどうかかわっているのだろうか。

科学技術の現状に対して批判あるいは警告がいろいろな形で提示されている。その中には農業技術と工業技術との性格のちがいを強調する議論がある。しかし、現代における重大な問題は、農業と工業との差異の程度を詮索することよりも、いっそう広い視野から見たときの両者に共通する問題の総合的検討である。

従来、人間に関する研究は自然科学の領域からはみ出るものとされ、その多くを哲学、宗教の領域に委ねられてきた。そればかりか、自然科学、哲学、宗教の間には相対立して譲らぬ人間観さえ存在した。しかし、幸いなことに現在では物質科学、生物科学の間の溝がしだいに埋められ、人間の肉体的、精神的現象は、分断されることなく一貫して探究するようになってきた。

本論文の目的は、この立場から、人類進化のドラマ中で農業が果たす役割を展望するものである。

人間化

人類学者によると、高等な生物でヒトほど広く地球上を占拠したものはいつの時代にも存在しなかったばかりでなく、生物界の事象が一般的にゆったりとしたリズムをもっているのに比べて驚くべき速さをもってヒトは地球を侵略し、ヒトは自分と規模の上であまりちがわぬような生物をすべて同化するか除去していることが分ってきたということである。しかも、もし全世界的分布能力において、人類と競い合うようにみえる別の生物があったとしても、それらはたいいていの場合人類によって運ばれ、人類のもっている拡大征服の能力のおかげに浴したにすぎないことも分ってきた¹⁾。このような歴史のあとをみると、人がそれを悔もうと悔むまいと、人類は自らの進化と発達の影響で他の動物を変形させるか死滅に追いやりつつある。

ヒト以前には道具に当るものは、生物体と渾然一体となっていた。つまり、動物学上の系統とよばれるものはすべて、四肢あるいは全身が或るひとつの道具に変形したものになっていて、モグラは土掘りの道具であり、馬は走る道具であるという具合である。これらは動物の属、科、目ごとに道具として特殊化したのである。社会昆虫の場合は、特定の個体だけが選ばれて、全身的に、戦争の道具あるいは生殖の道具に作りかえられている。しかし、いずれにしても道具は身体と渾然一体をなしており、道具の発明は生体の形で行われている。

ヒトの場合には事情は一変する。道具はそれを使用する四肢とは別ものとなり、このような全く新しい道具の発明ないし発見は二つの結果を誘発し、人類の出現以後の生命の歴史に深い影響をおよぼした。第1は、極端な力の増大（多様さと強さ）であり、第2は、意外にも有機体としての見かけ上の進化能力が急激に低下したことである。

ヒトは形を変えることなく進歩し、動物学的な型を変更することなしにその精神作用を無限に変化させることができる。それは一見すると、生物としての進化能力が急激に低下したように見えるが、実はそうではなくて、精神能力の進化が進むのである。

人類学者テイヤール・ド・シャルダンの考えでは、人類の系列における道具というものは、動物の系列における分化した器官と同価のものである。ヒトの場合は文化的とよばれ、動物の場合は有機的とよばれるが、ヒトの道具による活動と生命の自然的な活動とのつながりを認めることによって、前者は後者の変形された延長であり、その延長線上の一段高い相を表わすものだという結論に導かれる²⁾。

われわれの発明への志向と能力は、生物のもっている器官形成能力の「人間化したもの」にほかならないのであり、また反対に、有機界の進化の過程全体が、わが人間界の発達との類比によって理解できるようになる。

現代の神話

(1) 人間の登場

われわれが人間の起源をふりかえる場合、わずかな人類の骨を手がかりにして、その骨以前の時代までさかのぼろうとする。しかし、将来どんなに多くの骨や石器や土器のような物が見つかって、われわれが本当に知りたい秘密を提示してくれるかどうかは疑わしい。その秘密とは、どのようなプロセスで人間は人間らしさの萌芽を見つけ出し育てていったのか、という秘密である。これはどこまでも思弁と空想の範囲にとどまるだろう。この茫漠さのゆえにほとんどすべての民族は人間の起源、特質、運命を物語る神話を作り出したのである。

もしわれわれが考古学その他の科学の知識を用いたとしても、肝心のところで空想に頼るということになれば、人間の起源の物語は依然として「現代の科学的な神話」とよぶに相応しいものであろう。

われわれはもはや、外側の万能の神(造物主、創造者)をもってきて、何か創造の瞬間を述べようとはしない。宇宙科学、地質学、そして中でも生物進化学の助けを借

りて、「無限に近い程の長い時間をかけて目的と方向をゆっくりと強めながら、ついに人間は自分自身の中に自己意識を明滅させはじめた」という述べ方になっている。⁵⁾

すなわち、人間が舞台上に登場するよりもずっと以前に、多数の生物は多彩な形態をとり、永続し、また変化していた。それも、一つ一つが自分自身の属する類の流儀にしたがって、自分自身の属する種のライフサイクルの許容範囲内で、しかも自己をとりまく環境や生物仲間と相互に関係しながら、そうしてきた。人間が出てきたのは、生物的生命のこの宇宙的綱目の中からである。文明史研究家が言うように、創造者となる冒険に意識的にふみ出した動物、すなわち創造への生物の変形作業への道とは別のもつ一つの道を探し出した動物、これが人間である。

(2) 動物と人間との境界

「人間はこの世で理性を享けた唯一の生き物であって、人間の下には、ものを感じることはできても考えることのできない動物が、さまざまな段階をなして立っており、さらにその下に、生きることはできるが感じられない植物がある。それと同時にこれらの段階は確固として越えがたい境界でもある。自然は飛躍をしない」というのがアリストテレスの教えるところであった。それ以来、この生命体系は今世紀の初頭に至るまで通用していたし、われわれの日常の思考の中では今日でも通用している。

だが、現代の自然科学の世界像では、はじめ越えられないと考えられていた多くの段階は崩れて連続し、人間と動物との絶対的境界は認められなくなり、高等動物についての知識が深まり、行動の科学研究が進んで両者の境界は疑わしくなってきた。最近の数世紀の間に、人間を特別の地位に据え動物と区別していた段階はすっかり崩れ去って、人間観を覆っていた神秘のヴェールがはがされ、新たな科学的人間像のための道が開かれ、今までの不自然な幻想を捨て去った代わりに、人間がただ一度のものであるとともに進化の最先端に立っていることを理解する緒口をつかみはじめた。

かつては人類は、自然を自ら観察し思索し、科学の分野で見解を主張ができるほどに成熟していなかった。その時代に宗教は、人間や動物の存在について、事実に基づくというよりも「期待」をもとに発言し、人びとを統治していたのだ。いまや自然科学が新勢力としてこの分野の支配権を引き継ぎ、宗教は本来の領域である自然の背後に立っている問題を守る役に回ることで、哲学、自然科学と手を握って人間をめぐる環をつくり上げた。

ティヤールの考えでは、人間は自然の歴史をもつてい

て、この歴史によって連続的に宇宙の塵、物質の原子、分子、生物の世界と続いている。物理的世界のさまざまな出来事が、因果の鎖でつながっているのと全く同じように、生物の世界は世代の鎖でつながっている。アリストテレス以来、人間が動物を見下していた段は削りとられて、進化の過程を追ってすべての形態はゆっくりと生成するのだという認識が、多くの段にかわって一つの上昇する平面をつくり上げた。人間はこの発達の高点にいたけれども、ふり返ってみると、途中には縫い目も飛躍もなく、あるのは簡単なものから高等なものへの自然の生い立ちのあとだけである。⁶⁾

(3) 生物としての変化過程と文化としての変化過程

地球の大部分が熱帯性気候に覆われていた時、樹上生活をしてきた類猿の霊長類の群から人間はたちあらわれたようだ。少なくとも1つ以上の場所で、1つ以上の時点で、この動物は人間になる方向へ向って最初の一步をふみ出した。人類学者や生物学者が指摘するようないくつかの契機と原因（代謝作用に生じる或る変質、遺伝子に生じる或る突然変異、内的・精神的な飛躍など）によって、大きな脳を人間はもつに至った。その脳を使って何かを作ろうとする人間の持続的衝動が、人間を長い生涯へと旅立たせることになった。⁷⁾

人間の脳が身体に不相応な成長をとげたことこそ人間の最も近い動物仲間から人間自身を区別するものであった。栄養、生殖、防衛に用いられなくなったエネルギーが豊富に余ってくる条件もできた。他の動物では主として肉体の遊びのほうに使われてしまう過剰のバイタリティが、人間では音声やイメージや探索的行動に向わせるもとを作り出した。簡単に言えば、なんらの外側からの挑発を待つまでもなく、人間自身の成熟にうながされて、未分化ながら記号や制作に当てられる資質が人間内部から溢れ出てくるのである。

人間の直接の祖先たちは、このような発達をかなりの行程まで進めていた。それを完成したのは人間である。しかし、二本足で歩く能力はずっと遅れて獲得されたとみられている。また、動物的な信号や音声から人間に特有のフィーリングや意味を表現するコトバを作り出した。コトバは人間の観念連想を定着させ、増殖させる。

人間はそれ以前の動物とくらべて、幼年期が引きのばされた。人間は生物的には発達速度、生長速度の遅れた動物である。人間はこの長い幼年期のおかげで、遊びと試みの時間、学ぶための時間を見つけ出し、直接的環境だけでなく歴史を理解する時間、はるかな未来を夢みる

時間をも見つけ出した。人間は青春期に、生存のための圧力を受けずにすませるから、自己発展のためのレジヤーに恵まれていたのである。

また、人間は実用的発明とか仕事とかの活動よりもっと重大な人間の進歩をうながした。昆虫属は、建設や社会組織化の点で人間よりまさった能力を発達させたが、人間以外のどんな動物も情念を基礎にした芸術作品を創作する能力を示したものはない。

生物としての変化は何万年、何十万年にもわたるゆっくりとした変化であるが、人間は上述のようなことで自らを生物的諸制限から引きはなし、われわれが現在、文化とよぶ「第2の天性」をつくり出し、それを模倣と習慣によって伝達するようになった。この文化は、人間のもともとの生物構造よりも、人間にとっていっそう自然で本来的なものになった。なぜなら、文化は単に人間のありのままの過去と現在の集積だけでなく、人間がそうでありたいと憧れ、愛し、意図するものを含んでいるからである。

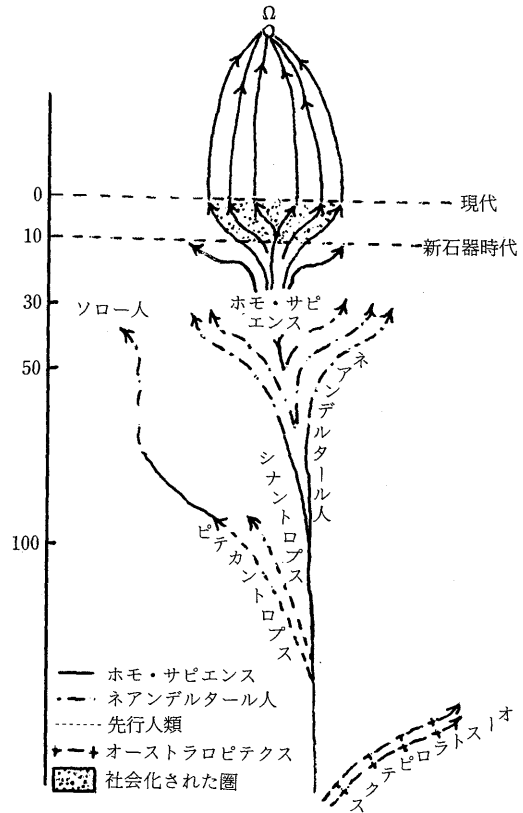
(4) 動物から脱却する人間

しかし人間は、自己転換の道をどんなに突き進んだとしても、動物的なものを置き去りにし、それと離れることは決してない。人間のユニークな創造活動の底には生物的創造に通じるエネルギーがある。人間の最高の理想をみざす崇高な熱望といえども、他の動物と同様に、食べたり、交合したり、食物を探したり、危険を避けたりする活動に依存している。一定量の動物的活動と動物的歓喜は、人間の最も深い人間性の中に属している。どんな離脱、超越も結局は人間の中に存在する動物的資質の活用によって行われる。

人間がこれらの最初のつながりを理解すれば、人間は生物的進化のドラマの中で他の生物たちの活動に対して恒常的に依存をし、人間の始源的本性が他の生物につながりをもつことを認めなければならない。人間はいまや、動物の中の支配的種であるとしても、人間の運命はいまも、すべての生命形式の繁栄と結びついている。そして、人間は理想とする未来の中へ自分自身の動物的諸器官と自分自身の自然史とを持ちこんでいく運命にあることも認めなければならないだろう。

初期農耕社会の大きな意味

動物的自然から人間的な自然への移行は、おそらく別々の場所で、時代がずれて行われたであろう。ある未分化の共通系統からはじまったものが、別々の類人猿の始祖



第1図 人類の層の発展を示す図。左側の数字は千年単位。これは最小限を示しているので、おそらく少なくとも二倍しなければならないだろう。オメガ点に集中する仮定の圏は単位目盛がつけてない。他の生物の層との類推からすれば、その持続期間は百万単位となる(ただし、オメガ点については本論文中では述べていない)。(ティヤール・ド・シャルダン『現象としての人間』p.224より引用)

をもった諸種族として出現したのであろう(第1図)。霊長類のヒト科に属するこれらの動物は、そもその初めは数も少なく、おまけに大洋や砂漠や山脈によって大きく隔離されていた。長い道のりの発展のなかで、彼らは同種個体からなる5つないし6つの大陸系主要集団に分かれた。これらの集団は、まず皮膚の色の相違からはじまり、血液型、免疫性、解剖学上、生理学上のこまやかな相違をも示しはじめた。しかし、ヒト全体は一方で交配でき繁殖できること、他方でコトバによるコミュニケ

ーションができることで、生物学的にも社会的にも1つの種になっている。

気候、植生、食物などの地域的なちがいから集団の間に文化的相違があらわれた。各集団は自分らの独特の表現や理想をもつタイプの人間を真に人間らしい人間と考えはじめたであろう。したがって、自分たちの文化を他の文化とくらべて、より中心的だと考えた。ただ人間であることにのみ、その集団の努力が使われつくしてしまい、それだけで精一杯の時代が長い期間続いたのであろう。

しかし、果物やくるみ、栗などの堅果が豊富にとれる地域では、人間らしさと人間らしい生活状態を求める最初の時代において、ヒマと豊かさがあつたと考えるのはそれほど不自然なことではない。

氷河期は人間のはじめの発展期にくりかえし訪れたが、その時期の苦勞のくり返しは、人間自身に生き残る知恵と熟練をいろんな形式で身につけさせた。その間に訪れる間氷期は、それと対照的に安楽と豊饒に恵まれた牧歌的な生活をもたらしたにちがいない。われわれ人間がいまでも絶えず脳裏に浮かべたがる黄金時代のイメージと伝説とは、おそらく熱帯的な豊饒さの蠱惑的魅力とそれを信じたいと願う人間の気持のあらわれであろう。

このことと深く関連すると思われるのは、そもそも最初から人間の生活には2つの側面、つまり技術的なものと芸術的なものがあるという点である。一方は主として苛烈な環境との闘いを意味し、他方は自己自身の性質を理想化してその表現を楽しむことである。生存の技術と悦楽の芸術。この2つは、氷河期の苛烈な「限界の棲処」と、遊びのゆとりをもち人間化を助けた「温和な棲処」と、の環境転換のリズムに対応している。

おそらく、旧石器時代の最終期であろうと思われるが、またそれは確実に新石器時代になる以前の時期のことであるが、動物から人間への転換がもはや後戻りしない点に達した。

この過程で動物としての狂暴性、混乱性、非合理性などの性質が全くぬけ落ちてしまったわけではないが、しかし人間は自分自身を形成し、さらにリフォームするための手段を手にした。もはや人間は動物ではなく、原始的ではあっても人間となった。学習を可能にし、学習の結果を保存し、未来の世代へ伝える方法をすでに獲得していた。

(1) 狩猟時代の名残り

人間は初めのうちは、まわりの環境に働きかけて人間

的な影響を刻みこむよりも、環境の作用を自分自身に刻みつける方が大きかっただろう。この状況が変化したのは、馴化や栽培という偉大な技術的改良が達成されたときである。それは植物の選抜と栽培、それに続いて耕地化すなわち熟畑化である。つまり馴化と栽培の仕事は、選択的で予測的な精神力を必要とするものであり、したがってこの農業を発明する過程は人間の自己陶冶にとっても深い影響を与え変化をもたらしした。これは文化の原型の形成に貢献するものであった。

定住に至るまでの流浪の生活を行っているうちは、女性の地位は劣位にあつたとしても止むを得ない面もあつたであろう。野牛や鹿の大群に交って狩猟し、それなくしては人間の食糧を入手できない旧石器時代の獵人群は、はげしい訓練を重ね、勇猛な精神を養うことで野獣の群を狩猟したのであるから、それ以前のように食べものを単に採っては食べて歩くのとは異なる肉体的精神的勇敢さが求められ、それを讃え尊重する習慣を發展させていた。長い期間、徳性として重んじられた男性的特徴、すなわち血を流したり、暴力行為を犯したりする能力が、これに伴って助長され、氷河期の最終時代以降になって、獵人たちではなく牧人たちが拡まる時代になつても、このような野蛮な残酷性は人間の共同体にその名残りを強く止めていたにちがいない。

(2) 農業革命・定住・生活革命

旧石器時代の最終期に、おおよそ8000年ないし1万年ぐらい前の或る決定的時点で、技術的、社会的革命が起こった。当然その基礎は部分的耕作発生以前の時期に準備されていた。人類学者は、この新しい時代を新石器時代とよぶので、われわれは研磨石器そのものに注意をひかれすぎるきらいがあるが、実は、石器の変化が示す技術的熟練の進歩以上に、もっと深い意味をもつ変化の時期であつたことに注目しなければならない。それは豆類、穀類、いも類などの作物の選択と耕作である。これこそ人間が生命をもった動植物の生長プロセスを洞察するに至つたことを物語る?

作物の栽培は主として女性の仕事であつた。獵人のように野生動物を殺してまわる代りに、女性は胎内の生命を育むように生命を大地の中で養育した。穀物の栽培をするようになって、人間ははじめて運や呪術よりも、自分自身の努力によって確実な食糧調達が可能になった。それとともにあらわれたのが、カマドと家庭である。この2つは永続的住処と規則正しい生活の存在を意味している。動物を飼育するようになって、それ以前の不安定

な遊牧生活を脱却できたのだが、人間の定住をもたらしたのは作物の栽培に他ならない。

選抜や栽培や養畜は人間の発展にとって、目にみえない重要な副次効果をもたらした。作物・家畜の繁殖、育成の管理の上で手に入れた知識はそれにとどまらず、人間という種にまで拡張されていったことも想像にかたくない。現代の生理学が示すように、栄養事情がよくなると思春期の状態が早まり、生殖を促進する。こうして新石器時代の初期においても、食糧の量的増大が人口増大への二重の刺激となったことであろう。

(3) 人間的環境（ムラの生活）の成立

初期の人口の地理的分布状況は、まばらで分散した状態であった。作物栽培が成立したとてさえ、食糧供給力はなお低位にあり、人びとは何世代もささやかな小村落で暮していたにちがいない。そして食糧供給力が増大するにつれて、このようなささやかな定住村落の数が増えていったことであろう。こうして人間は、肉体として人間になっただけでなく、直接接触的な身近な環境のなかで第1次的共同体の世界になじんでいった。すなわち家族、種族、氏族、村落、近隣関係がそれである。これらのすべては共通的な人間世界をつくり出した。

この家族的なムラの生活文化のなかに、人生のすべての場合に決断し、行動の指針となる俚諺や箴言が生まれてきた。この安全と平和のなかで、村人たちは安住の地を見いだしていた。しかし長い間にわたって、食料の不足は常時的なものであった。それだからこそ原初的な社会では、自分たちの欠乏を和らげてくれる豊作の季節は最大の喜びとして迎えられるのである。つまり、祭りを祝う暇を与えてくれ、幸運な獲物や思いがけぬ大豊作こそ無上の喜びであった。また余分な富はすべて、これを誕生、結婚、死という一生の大きなふし目のためにとっておくのが原初人のやり方であった。

原始生活においても未来への感覚が出てきたことに注意する必要がある。未来への感覚は決して近代人のものではない。人間社会は、そもそものはじめから予見と予測を示している。厳冬をしのぐための食糧を貯えるという広く見られる動物の習性とは比較にならない理性的行動である。儀礼をとまなう埋葬の慣行は、未来とかわりをもっている。どんな現在の判断のなかにも未来への考慮を入れることは、知性と道徳的責任感の両方が発達したしるしであるが、それと同じように、原初人の不安と用心の入りまじりも、人間の発展のしるしであった。

(4) 原初的な文化伝統の現代的意味

原初的な社会が築いた伝統は、その程度にちがいはあっても、世界のすべての場所で、現在に至るまで人間をとらえつづけている。北アメリカでは最も稀薄だろうが、インドと中国ではいまだに濃厚である。ヨーロッパ全域では真夏の夜の狂乱やカーニバルの中に残っている。また民間伝承や呪いの中に残っている。さらに、吉日とか厄日とかの占いや迷信かつぎの中に残っている。数世紀にわたる合理的教育の時代を経ても、ちっともなくならない位に強固である。その中には、現代の科学の目でみれば迷信的のものも少なからずあるが、古来のタブー、呪術的慣行、神話的描写はこの伝承と結びついていまなお共存している。

①タブー

その中でも影響の最も深いものは、タブーの作用である。タブーは対象物や行為に絶対禁止の札をはりつけるものである。ポリネシアでは男が用いるカヌーには女は乗せない。死人に触れた者は生きていようと接触する前に身を浄めなければならない。近親性交を禁制するタブーのような、ほとんど世界的ひろがりをもったタブーさえ、部分的合理性以上に出るものはほとんどない。にもかかわらず、タブーによる絶対的禁制は、無軌道になりがちに誘惑や無意識的なプレッシャーを防ぐために人間が発明した偉大な防衛装置の1つと言うべきである。

②土地と職業

原初的な社会の伝統のなかで、人間の精神につよい刻印をおしたものは、土地と職業の原初的な形態である。この2つの支配はいまだに続いている。

土地はただの地域ではなく、記憶や希望に満ちた情感の宝庫である。人間の先祖が埋葬され、人間の手によって仕上げられた土地である。その場所を守り復興することこそ各世代が最も望む労働であった。

原初的な文化での仕事の基本的形式は、それが農業であれ、狩猟、漁労、舟こぎ、鉱物掘りであれ、人間の人柄を作りかえ、さまざまな環境が人間の精神を発達させるのに役立った。

土地に結びついた原初的な文化は、人間生存のすべての部分の間につり合いがとれていた。しかし、その反面、閉鎖的共同体は閉鎖的人格を生み出した。親切、誠実、正直、友情、寛容などは共同体内の人びとだけに適用され、外側までは及ばなかった。現在でさえ広い地域の統一を邪魔する傾向を残していて、開かれた世界の時代になっても、容易に開放された広い世界に入っていけず、しりごみする傾向がある。

しかし、なにもかもすべてが孤立したムラの中から生まれたとは言えない。人間的発展がすすむにつれて、暦や諸法律があらわれたのは、新石器時代のムラの中からはたは明らかなであろう。村の社や寺や礼拝堂があらわれたのは、イエの守り神からではない。

③文明社会のノスタルジー

原初的生活は今でもなおわれわれ現代人を魅惑し、よびかける。現代人が文明の複雑さと煩わしさとの対決にくたび果てる時、また病気がわれわれの生命力を低下させ心の葛藤が社会関係を分裂させるとき、われわれは森や海辺の小さな村落を訪ねたくなる。そこでわれわれは自然の環境との一体感をもち、「やっとほんとうの自分にかえった」という気持になる。このような時ほどすきゆく瞬間に満足を覚えるときはない。純粹無垢な生き方の喜びの時にこそ、生命は集中し、完成する。そのとき、仕事は再び遊びとなり、生活それ自体がもはや解決をせまられる問題ではなくなるのだ。ロマン主義の理論的根拠となったものは、石器文化時代からの規範への復帰を求める心情であった。

このような満足すべき環境つまり人間的自然と深く調和した環境の中にいれば、そのような環境がどれほどの苦闘の末に獲得されたものであるかを忘れて難無く存在していたかのように思ってしまう。それはやすやすとでき上ったものではないのである。

文明世界とその眺望

(1) 文明すなわち都市文化の社会

文明化は都市化と根を同じくしている⁹⁾。そして、文明の諸制度は、ただそれ以前の原初的人間社会が自動的に増大して生まれたのではなく、人間の意図的発明、意識的な選択の結果である。

文明が人間にもたらしたのは、分業と特殊専門化にもとづく新しい統一であった。すなわち原初的の社会のように生命と生活の共通理解に根ざし祖先伝来の合意から自然に生まれるのではなく、分業し専門化した人びとの間の対立を和らげ、運営しようとする努力から生まれる新しい統一である。人びとの心のうちにもっていた法と秩序に依存していた社会から、外化された法と秩序すなわち明示的規則で異種の共同体や多様な地域的慣習を1つにまとめる社会へと変化させた。紀元前7千年から紀元前2千年の間に、大きな技術進歩がエジプトから中国にいたる広い前線を舞台にして起こった¹⁰⁾それは、植物の栽培にはじまり、ついで家畜の飼育によって促進された。な

かでも灌漑できる肥沃地に穀類が栽培されるようになると、人口扶養力が増し、食料の貯蔵性が向上した。その結果、生活は以前にはみられぬほどの安定性、持続性、定住性をもつようになった。武器や戦車をつくり出した青銅器時代には、中央集権的な政治統制がすすめられ、それにひきつづく鉄器時代には自然を征服し、人間を強制的に指令下に置くための装置が容易に整った。

牡牛と鋤が用いられ余剰労働が大量に供給でき、運河、用水、堤防、河流の転換さえできるようになった。これらの集団的改革につれて、すべての河沿いの谷あいはいは1つの経済的、政治的単位となった。このような変化の中から、文明は一方で専制的王者あるいは支配者という自律人格を発達させ、他方において労働の分割と仕事の専門化によって隷属的部分人間をつくり出した。この部分人間は、彼らの支配者のもつ新しい属性である自律性をまだもてないままで、自分の全体性を喪失してしまったのであった。

エジプトやメソポタミアの最初の農耕社会は、都市の成立によって文明をもつことになった。原始的村落でも、農耕、水利、狩猟、工作の生産活動はあり、祭礼のような社会的な行動もあったが、これらは必要に応じて社会の成員がその時、その時に分担して行われたものであって、部門ができ専門的にその仕事をもつというものではなかった。ところが都市が成立すると、その人口の一部は生産上、あるいは経済上の活動以外にいわゆる非生産部門に専門的に従事し、のちには世襲的にさえなってくる。政治、行政、軍事、祭礼、宗教などのほかに、農業、工作の仕事を担当し、その後には商業や貿易の担当者も出現した。都市とはこのような人びとの職能上における機能文化が行われている大型の集団である¹¹⁾

このように文明は、兵隊、商人、学者、書記、行政官という固定した永続的役割をもつ職業集団をつくり出した。この特殊専門化した集団は機械的能率と専門的技術でもって、その職業をなりわいとした。こうして文明人は、仕事、遊び、家庭、宗教のまざり合った村落の共同体がもっていた隣近所的な和合を失っていった。なかでも自分の精神の単一性を失った。その代りに全体からの離脱と多様性を獲得した。文明から生まれた部分的自己は専門的な機械類を発明するずっと以前に、すでに限定された機械的秩序を成立させる可能性をもっていた。

この新しい秩序のもとでは、首都は統一の社会的主役であり、首都のなかの王宮と神殿は集中された権力と官僚的行政機関の所在地であった。原初的の社会の長老の寄合いや慣習にしばられていた地域集合の機能を、いまや

専制的統治者が行うようになった。その変化の契機となったのは、敏速な決定を必要とする緊急非常事態の勃発であった。地方的慣習の束縛を脱するだけでなく、もはや新しい現実合わなくなった格言的知恵の束縛からも自由になり、敏速な判断力、聡明な選択によって集団に統一的決定を与えた。歴史的にみると、この集中化は状況が緩和されると、より地方的な権威への逆戻りがくり返された。幾度かのくり返しを経験して分散した村落文化から中央集権の都市支配への変化がついに決定的となった。

文明は技術的手段、記号的抽象物、中央集権的政治権力によって、人間の大きな集団を未曾有の共通目的をもったいっそう大きな共同体へ束ね、1つにした。書かれた公文書、記録保存の実行、伝説や神話の記述、共通の暦、共通の貨幣単位、共通の法律、共同の施設、共同の大会合場、これらは大きな業績である。交易や職業の専門化、技能の洗練が起り、生産性は高まった。記号体系を発明したことは世界を秩序づけた。軍隊や労働集団の力を増やした。文明は組織を思いのままに動かすことによって、食料の獲得にあくせくする必要をなくし、そのうえ精神をみがくことができるようになった。都市では原初的社會ではとうてい工面できなかったほどの資本を集中投下できるようになった。そのおかげで宮廷、社寺、図書館、裁判所ができた。

文明は原初的社會の生活經濟を貨幣經濟に変えた。農村部ではおそくまで生命尊重的生活經濟が残っていたが、新しい都市環境では文明人は原初的時代の人間の知らなかった野心や競争によって動かされた。大都市の中心部では、宗教、交易、法律、行政にたずさわってそれを専門の職とした連中は生活上の安定と強化がみられた。しかし、彼らの生活を支える側の人びと、すなわち貢納する多数の農民たちには、しだいに生活の低下、価値の低落が起って来た。

文明はその初めから、機械化された努力による非人格化の性質をもったものであった。そしてこの軌道へ積極的に喜々として服従することこそ、文明人の主要特徴になったのである。かりに君主という外側の主人が、誰かを使って強制的にその軌道にのせることをさせなくても、文明人は金銭、名声、権力を追及するなかで、そのような生活の形式を自分自身で自発的にとるようになった。

戦争はそもそも文明化した国々相互の自然な関係にはかならなかつた、と言われていた。¹³⁾文明は戦争の技術を発明し、文明生活の全体構造のなかへ戦争を編入する。戦争は国内的衝突を国家の外側へ放り出し、輸出し、あ

る時は人間の大集団の相互交流のきっかけをつくったが、文明の解体の推進ともなった。組織的軍隊は、文明という力的手段であるだけでなく、かえって象徴であり、テクノロジーの政治への最初の適用であったとみることができる。

(2) 基軸宗教

マンフォードは、紀元前6世紀以後におこった人間の価値と目標における深刻な変化を指すために、この語を用いた。¹⁴⁾すなわち、この時期に地球上の大きく隔たった幾つかの地点で、宗教的、道徳的な性格をもつ1つの深刻な変化が起こった。それは最古の世界宗教である仏教、ゾロアスター教であり、少し遅れてキリスト教、ミトラ教、マニ教、イスラム教があらわれ、人間生活の転換を促した。この転換とともに新しい種類の人物と共同体が出現した。もちろん、それ以前に宗教や倫理の発展がその基礎にあったことは無視できない。古代エジプト、インド、イスラエルなどの宗教活動がそれである。

この基軸宗教による主要な変化は、人間的パーソナリティの再定義であった。預言者の生き方、彼の表現する価値は他の人間にとって模範として従うべき典型となった。それ以前の、超自然的存在ではなく、愛慕すべき1人の人間である。前基軸宗教が空想的に描き出した神のイメージは、人間から遠く隔たっていて、すさまじく恐ろしいものであった。それでいて詳しくみると、神のイメージは肉欲的で嫉妬深く、人間的または人間以下の性質を巨大化させたにすぎなかつた。人間自身が向上すると、そのような神のイメージはパラノイアに思えてくる。

基軸宗教の預言者は、神のイメージを再定義したのであった。

基軸宗教が形成されるのは、文明生活の普通の満足や通常的安全が脅かされる社會の崩壊期においてであった。

基軸宗教は種族や村落や都市や國家の境を越えて進んだ。あらゆる人びとを新しい精神生活へ勧誘した。社會の崩壊期のなかで、基軸宗教は生命に対する脅威を生命再生の機会へとふり替えようとした。そしてこの事実によって信仰者に対して最悪の状況に直面する勇氣を与えた。

基軸宗教の運動と並行して出てきたものに基軸哲学がある。この双方は直観に依存しているが、基軸哲学の方はより理性的に認められたものであった。ギリシャのソロン、ソクラテス、プラトン、アリストテレスたちは人格を形成し、知的集中によって精神を指導する方法の発見につとめた。孔子は鬼神をもち出すことなく、究学の

実行と理性の練磨を説いた。彼は生きとし生けるものの自然な仁愛と原初的社会的祭式や礼楽をむすびつけて、彼は生きている家族と死んだ祖先との間の古くからの同胞関係、すなわち孝行を再建した。

彼ら基軸哲学者たちは、それぞれの文明がその発展途上でもすれば弱体化しがちの人間のきずなを強化しようとしたのである。

基軸宗教と基軸哲学とは共に世界主義を唱えながら分裂と分派活動にむかう本来的傾向をもっている。それでも社会的価値を内面の世界へ移しかえることによって、人間に自由と創造性とを与えるのに貢献した。しかしただ魂だけを相手にすることで、基軸宗教は人間の本性全体を公平に扱いそこねた。そして失望と挫折感を与えることにもなった。

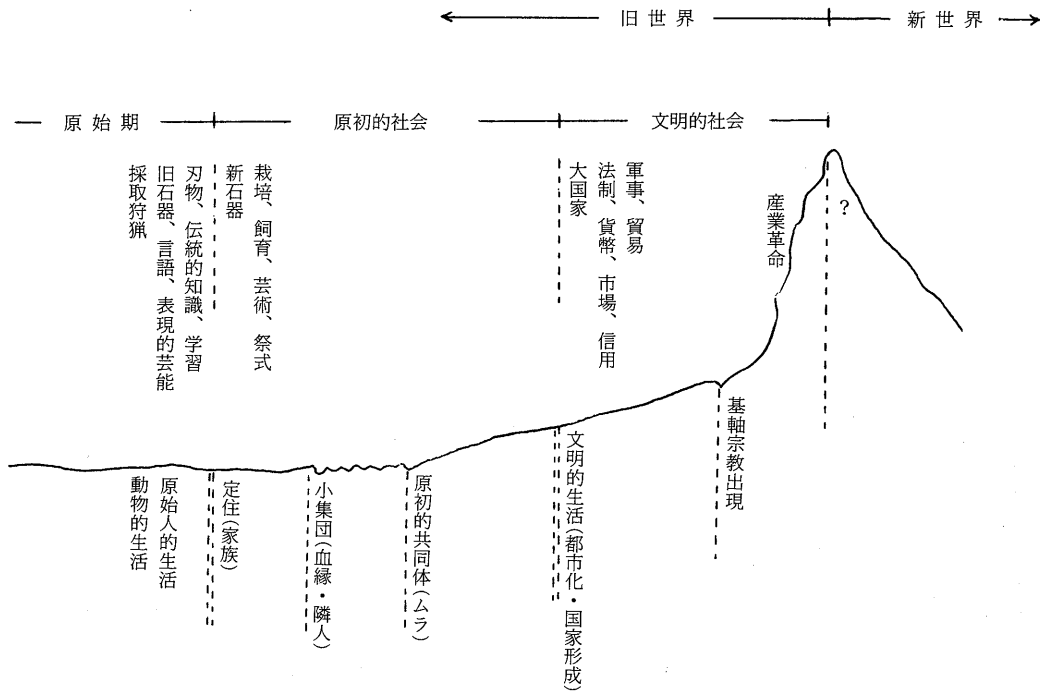
どの高次の宗教もその発展がある段階に達すると、自分の本来もっていた目標から疎外され、宗教改革を行わざるを得なくなる。また、基軸宗教の中心部においても自己閉鎖的種族社会や国家社会にも劣らぬ排他性がある。¹²⁾

文明人から基軸宗教人への移行が1つの進歩であった

のは、それが道徳性の支配領域をひろげ、それまで低い評価しか与えられてこなかった自己完成への性向の価値を引きあげたからである。しかし、この転換は不完全のままとどまり、内面を別にすれば基軸宗教人が文明人に完全にとって代ったわけではない。だが、基軸宗教と基軸哲学とは、人間の本性と運命の共通概念に向って収斂していることは確かであり、将来の世界主義への貴重な準備をしていると考えられる。

(3) 現代の眺望

人間は最初の動物的自己から向上し、現在の社会的自己の状態に至るまでの諸転換ののち、いま人間は分水嶺に登りつめた。そこからは前方に新しい景色が望みできる。ふり返ると、目に入るのは動物的生活と原始的な生活との長い前景であり、またその手前には種族的文化の泥路が横たわっている。それよりさらに手前には原初的なムラ共同体の耕地の丘があり、その一部分はテラスのように整備された文明社会の山の褶曲がある。最後は「基軸宗教」(人間の倫理を支える高等宗教・哲学)の氷河水原となっている。ここにいま人間は立っている。



第2図 人間社会進化の歩み

しかし、その頂上を越えて前方を見ると、そこでは風景はいままでと一変する。足下の台地は幾何学的に構築され、コンクリートの高速自動車道路が交叉し整然とはしているが、人工的なものになり、すべての自然景観の姿はない。

いまわれわれが立っている頂上は、「新世界」への出発点である。これからは、「旧世界」で獲得した習慣はほとんど何の役にも立たない。人間がここまでたどりつくまでは、基軸宗教の水河水原を渡りながらあまりの苦しみのために、元の低い次元の生活へ後退しようかとも考えたこともあった。分水嶺に到達したいまではもうその気持は消失していて、眼下に広がる森も耕地も果樹園もない無味乾燥な台地へ向って駆け下りていこうとしている(第2図)。これは或る文明史家が画いた人間進化の風景画の一齣である。

この地点に立てば、「旧世界」の人間の歩んだ道は明瞭に眺望しうる。19世紀までに、人間は数と勢力と業績において地球を支配した。「旧世界」は、いろんな特徴をもった社会が認められたけれども、「新世界」はこれとは比較にならぬほど大きくちがったものになる。

①旧世界の諸社会の共通性

「旧世界」の諸社会は、原初社会という共通の出発点からスタートし、その後の成長はそれぞれ自己閉鎖的にみえるけれども、その実は歴史のコースの中でどれも相似性をもっていた。それはあたかも1つの生物種が、生活の各ステージについて他の生物的種と同じようにサイクルを通過していくかのようにみえる。

たとえば、領主支配的経済(原始的マナー経済)から商業的都市経済(職能専門化と市場のはじまりの経済)への経済転換は、メソポタミア(紀元前2000~3000年)の場合も、西ヨーロッパ(紀元10~13世紀)の中世で封建制度が部分的に自由都市に置き代えられていく場合も、大きくみれば同種の過程をたどっている。日本の古代荘園経済(紀元7~8世紀以前の)から鎌倉幕府成立以降の商業的都市経済への転換の場合も、日本独特の色合いはあっても、同様の過程と考えられる。

もちろん「旧世界」人は、単一の世界文化をつくり出しはしなかった。それどころか、多様性と個性の強調こそ「旧世界」の特徴であった。ところが「旧世界」の中の1つの社会がもつ観念や理想は、容易に他の社会に翻訳できるものであって、彼らの生み出した生活は同じ構造をもっており、彼らの精神は同一の枠組みの中で活動したのである。5000年の歩みのなかで「旧世界」文化は北半球の大部分にひろがり、それまでの非冒険的でくり

かえしの種族的文化にとって代った。現在でもなお種族的文化が残存しているものは、旧世界文化の週辺地帯において頑固にしがみついているものである。

②「旧世界」文化の階層構造

「旧世界」文化は長い歴史の集積である。それを形成しているのは3つの層である。すなわち原初的層、文明的層、基軸宗教的層である。その最低辺には、もっと古い層である原始的層があって、これは地球上の人間社会のもろもろの生活形態の共通基盤になっているものである。「旧世界」文化のうち上層部が侵食をうけても、原初的層は深いところで残りつづける。「旧世界」文化が原初的社会的生き方を保存し、つぎにこの生き方によって保存されていくという相互依存の関係がある。

「旧世界」文化が成長し、地球を支配したのは、それ以前の粗野な社会にはなかった生活の豊かさをもたらしたからである。

「新世界」における転換

(1) 「新世界」人の特徴

いまわれわれは、「旧世界」と「新世界」との分水嶺に立っている。「旧世界」からの離脱は人間の平等概念の獲得から起こった。平等は、現世におけるすべての社会正義にとって不可欠の要求となった。平等の要求は14世紀以来くり返されていたが、フランス革命でもう一度はっきりと表明され、封建的身分による権利や特権の劇的な放棄となったのである。そしてついに、19世紀には平等化は社会主義の力強いアピールをもたらした。

平等への要求と並んで現われたのは、未来志向の熱意であった。「新世界」のイデオロギーと計画には、もはや伝統的な既成形式の重視はなく、過去との断絶、新出発、革新、新発明、新開発へとエネルギーを集中した。静態的で限界的である代りに、「新世界」文化は動態的であり、変化のための変化、運動のための運動に熱意をあげた。「進歩」の観念が普及し、人類は無知の状態から知識ある状態へ、無力から力へと自動的に進んでいくものとみなすようになったのである。

(2) 「新世界」文化の成果

しかし「新世界」文化は、自分の歴史的蓄積を保持している文明の中で存在しているからこそ、人間に役立っていたことを忘れてはならない。「新世界」的な技術体系は、世界的規模での輸送、旅行、コミュニケーションを可能にし、人類を史上はじめて単一の活動単位にまとめあげた。それにより長い間自閉的かつ排他的であった人

間の諸社会に、共通の法と秩序、共通の言語をもたらした。こうしてこの文化は、諸人種、諸文化間にこの交流の口火を切り、周期的反復から脱して、連続的發展への展望をきり開いた。

そのうえ、「新世界」文化は人間的諸力への新しい自信をもたせた。科学的知識に裏付けられれば人間はもっと先まで到達できるという新しい革新をめざめさせた。資源開発、エネルギー開発によって、人間を大昔からの貧困と欠乏から解放する見通しを開いた。また、政治的民主主義の諸制度は平等達成のために仕組みを整備し、「旧世界」文化が抱えていた欠陥を是正した。これらは大きな収穫であった。

(3) 人間性の稀薄化

しかしながら、「新世界」はわれわれの期待をまだ半分しか表現していない。なぜなら、人間の人格の主観的側面がここには表現されていないからである。技術的発明の過程にはいつてくる主観的側面だけが認められるにすぎないからである。「新世界」文化は真に人間的なものの多くを排除し、聖なるものへ向うためのヒントを忘れてしまった。この文化の原則、つまり経済性の原則は、生命と生活の高次の領域で働く原則とはまさに正反対の原則である。

人間の文化における進化過程での最高の所産は、機械体系ではなく人間の人格である。しかるに、実際の「新世界」人の心の中には、この真理は浸透することはなかった。だが、真に必要なであったのは、人間の発展にとっての新しい理想とその実現、つまり、いっそう人間的な自己形成に向う大きな路への転換である。

む す び

長期間にわたる動物的人間の時代に支配的であった人間の本能的生命と生活は、歴史の進むにつれて支配力を失っていき、これに代って知性の働きが人間の活動領域を支配し、統制力を強めてきた。知性は人間の活動に対する統制を確実にし、いまでは「物理的」活動の領域から、「生物的」および人間社会の活動の領域まで、その手をのばしている。

現代では、確かに人間の本性は決定的に重要な変化を

蒙りは始めている。「没人格化」された現代技術が普及すれば、人間はこの世界で生き残るために、人間自身もこの機械体系への完全な適応を余儀なくされる。そうなれば人間はとめどもなく画一化の方向へ動かされ、人間の本性からますます分離させられる。

人間社会は進歩に向っているのだと信じて疑わなかった進路を、最も根本的に反省すると、人間はもう一度の転換を求められていることに気が付く。われわれは機械化、画一化、オートメーション化へと盲目的に流されていくのではなく、そもそものはじめに、ヒト科の原人を人間にまで転換させた長期にわたる努力を、確乎とした意思をもって再演しなければならない。

文 献

- 1) 岩村 忍：東洋の発見。講談社、東京(1976) pp.17~30
- 2) ヨアヒム・イリース：人間の動物学。晶文社、東京(1979) p.54
- 3) ルイス・マンフォード：人間一過去・現在・未来(上)。岩波書店、東京(1978) p.5
- 4) ルイス・マンフォード：人間一過去・現在・未来(上)。岩波書店、東京(1978) pp.6~7
- 5) ルイス・マンフォード：人間一過去・現在・未来(上)。岩波書店、東京(1978) p.12
- 6) ルイス・マンフォード：人間一過去・現在・未来(上)。岩波書店、東京(1978) pp.51~54
- 7) ルイス・マンフォード：歴史の都市・明日の都市。新潮社、東京(1985) pp.79~95
- 8) ルイス・マンフォード：人間一過去・現在・未来(上)。岩波書店、東京(1978) pp.125~130
- 9) ルイス・マンフォード：人間一過去・現在・未来(上)。岩波書店、東京(1978) pp.175~177
- 10) ルイス・マンフォード：人間一過去・現在・未来(上)。岩波書店、東京(1978) pp.99~102
- 11) 西川幸治：日本都市史研究。日本放送出版協会、東京(1980) pp.3~24
- 12) テイヤール・ド・シャルダン：過去のビジョン。みすず書房、東京(1971) pp.63~64
- 13) テイヤール・ド・シャルダン：現象としての人間。みすず書房、東京(1985) pp.187~209